

論 文

中国新時期文学の一断面

— 謹容著「人到中年」について —

A Study of Chen Rong's *Ren Dao Zhongnian* in the New Period of Chinese Literature after the Cultural Revolution

大島 吉郎

Yoshiro OSHIMA

Key words : 新時期文学, 反思文学, 謹容, 「人到中年」

1. はじめに

中国現代文学史において、1965年11月姚文元による「海瑞罷官」批判に端を発し¹⁾、1966年から1976年10月に「四人組」逮捕をもって終焉を迎える「(プロレタリア)文化大革命」(以下「文革」と略称)²⁾をはさんでの作品には、顕著な構造的転換を指摘することができる³⁾。文革中は、浩然など、ある限られた範囲の作家にのみ作品発表の機会が与えられ⁴⁾、一方「四人組」によって権威付けされない作家による執筆活動には、強い思想的制約がはたらいていたのとは対照的に、文革終結後の70年代後半からは、「四人組」の影響を受けない作家による、おびただしい数の作品が登場するとともに、それらの作品はさまざまな文学賞⁵⁾の対象となっていた経緯がある⁶⁾。1978年12月に開催された「中国共産党第11期第3届中央全体会議」(中共十一期三中全会)で採択された鄧小平主導による「改革開放」路線は、その後の中国社会、中国経済に大きな変化をもたらした

のみならず、「80後(Bāngínhòu)」とも総称される1980年代以降の中国における文学界に、多大な影響を及ぼして来た⁷⁾。

本稿では「80後」時代の幕開けを告げるともいえる1980年1月に発表され、多くの議論を巻き起こした中篇小説「人到中年」とその作者謹容についての記述を行うとともに、日本における同作品に関する翻訳についても、現在知り得る状況を述べることで、文革後の早い段階における中国現代文学史の一断面を詳らかにしようとするものである。

吉田富夫(1987pp.4)、萩野脩二(2010pp.222)等によれば、劉心武著『班主任』⁸⁾以来の最初の10年を「新時期文学」と称し、大体1985、6年までを「新時期文学」と言う。「人到中年」は、ちょうどこの「新時期文学」に執筆され、発表された作品である。

2. 謹容について

「人到中年」の著者である謹容(Chén Róng; シンヨウ、あるいはジンヨウ)については、作品が掲載されて

1) 姚文元著《評新編历史剧〈海瑞罢官〉》(丸山他1985pp.284)。《海瑞罢官》は、1961年1月《北京文艺》に発表された呉晗の戯曲で、明代の朝廷を舞台とする歴史劇(丸山他1985pp.26)。
2) 中国では「十年浩劫」とも称される。
3) 竹内実・萩野脩二「中国文学の新しい波——編著者まえがき」(竹内他1987pp.1-7)参照。作品に見られる具体的な構成については丸山(1983pp.81-82)を参照。
4) 宇野木(2003pp.22)、桵尾(2017pp.391)参照。
5) 茅盾文学賞、児童文学賞、北京文学賞、雨花文文学賞、全国優秀短編小説賞、全国優秀中編小説賞、全国優秀長編小説賞などが挙げられる。

6) この時期に現れた作家には、王安憶・高曉声・蔣子龍・謹容・戴厚英・張潔・張賢亮・張抗抗・張承志・陳国凱・陳世旭・鉄凝・鄧友梅・馮驥才・李国文・李存葆・劉索拉・劉心武・梁曉声・林斤瀾などがいる(萩野2010pp.223)。
7) 宇野木(2003pp.24)によれば、「文学領域でいえば、改革とは、脱文革へ向けた着実な歩みであり、開放とは、欧米(日本も含む)の文学・理論の急速な受容ということになるだろう。」との解釈が可能である。
8) 1977年11月、《人民文学》第11期に発表され、1978年には全国優秀短編小説賞を受賞している(丸山・伊藤・新村1985pp.298)。

いる作品集に著者自身による紹介の文章⁹⁾が記されており、文学事典等に記述される内容ともおおむね一致しているが、詳細に見ていくと、中学卒業を目前に控えながら西南工人出版社の店舗に勤務するに至った経緯、高校卒業資格取得について、1960年代前半、文革前の記述に異同が見られ、ロシア語教師としての教職に関する事も詳細には述べられぬまま、曖昧のままのものが多数を占めているのが実際の状況であるため、これら幾つかの点については、著者自身による経歴紹介、あるいは年譜によって確かめる必要があった。本稿では謙容の年譜、随筆等も参照することで、従来確認が必要とされていた記述を補いたいと考える。

“作者小伝”によれば、謙容の執筆活動は1975年の長編小説『万年青』¹⁰⁾から始まるという。劉心武著『班主任』より2年早く、文革末期におけるこの作品は、文革終結後における新たな時代への通過点として注目し得る作品であると言える。

以下、先行研究の中から高島(1985:pp.152)、福地(1983:pp.71)、辻田(1999:pp.593-594)等の記述を参照しながら、著者謙容について90年代までの略歴を中心にまとめて見ることにする。

謙容(1936.10.3—)¹¹⁾、本名は謙徳容¹²⁾、作家、女性¹³⁾。原籍は四川省巫山県。湖北省漢口で生まれ¹⁴⁾、戦火を逃れるため成都、北京、重慶などで幼少期、学齢期

を過ごす。父親は国民党政府の最高法院長を歴任。51年3月、父親が追放されたため自活を決意し¹⁵⁾、中学卒業を前に、重慶で創業間もない西南工人出版社販売部門の社員となり書籍の販売を担当。52年夏、西南工人日報編集部に移り、読者通信係¹⁶⁾となる。この間中学校、高校課程を自学自習しながらラジオ講座でロシア語を独習。54年18歳のときに北京俄文専修学校¹⁷⁾(後身是北京俄語学院、北京外語学院、現北京外国語大学)に入学、56年中国新民主主義青年団(後の中国共産主義青年団)に加入、夏休みに結婚¹⁸⁾。57年(校名変更後の北京俄語学院を)卒業、同年9月、中央広播事業局に配属されロシア語の翻訳、音楽編集に携わるが、62年、持病である神経症のため¹⁹⁾、勤務中たびたび倒れることが原因となって、北京市教育局へ配置転換となり、中学校でロシア語教師として教鞭を執るが離職²⁰⁾。63年秋、二人の子供を上海の親戚の家に預け、夫とは離れて単身、山西日報社社長呉象の紹介で山西省汾陽県万年青公社賈家庄大隊に寄寓しながら療養する中で小説を書き始めた。健康を回復した後64年、北京へもどり、5幕のシナリオ『万年青』を執筆、完成。文革中の69年から北京市通県農村に4年

15) 辻田(1999:pp.593)による。

16) 《中国文学家辞典(現代第三分冊)》(pp.537)によれば“読者来信組”。林芳(1984:pp.175)は“愛読者通信係”とする。謙容(1984:pp.25)は“1952年、西南工人出版社門市部并入新华书店。我被调到西南工人日报编辑部工作。在编辑部，我是一个‘最底层’的工作人员。登记来信，分发来稿，收抄记录新闻。我努力完成分配我的每一项工作，并且自学俄语，画画和高中课程。”と当時の様子を記す。

17) 謙容(1984:pp.25)、朱棟霖他(2007:pp.172)“北京俄文専修学校”に基づく。《中国文学家辞典(現代第三分冊)》(pp.537)は“北京俄语学院”とするが、1954年であれば1955年6月に校名変更する前であり、“北京俄文専修学校”が正しい(北京俄文専修学校: http://baike.baidu.com/link?url=gA8Re3kfkVORcaf_sPfwxwA_IRpMs7c4LCzNm07fRNo84PIAPRO7p1PGHPs47S9491gu88Jia3z5U41BGfa7nd5QfvgA7LeYQQe5J0sK7YgZJpnsLhAflUmvMuZgFn9K7FYpekoIORIkPpSIYcORPudDfzh9IL4_w9CN3XeXTf_afQ5cdwi4MYd4TSGp-y参照)。“俄文”は「露文：ロシア語」の意。

18) 何火任・王子紅(1984:pp.12)によれば1956年夏、21歳のときに《人民日报》社に勤務する范榮康と結婚している。「范榮康」は改名後の名前であり、「梁達」がもとの名前で、1930年南通の生まれ(范榮康: <http://baike.baidu.com/item/%E8%8C%83%E8%8D%A3%E5%BA%B7/5811994>参照)。

19) 何火任・王子紅(1984:pp.12)に“因患神经官能等多种疾病”とある。

20) 朱棟霖他(2007:pp.172)は“1962年因疾病纏身被机关精简，1963年经朋友介绍到山西汾阳县賈家庄寄居，1964年回北京。”と述べるが、教職に就いた経歴については触れる所が無い。辻田(1999:pp.593)は「57年北京ロシア語学院卒業後、中央人民放送局、北京市教育局で働く。」と記すが、やはり教職との関係については明らかにしていない。

9) 《1977-1980全国获奖中篇小说集(上)》(pp.89-90)に“作者小伝”がある。この訳文については柴田清伊知訳『現代中国中編小説選——人、中年に到れば・航路標識のない河で』(pp.109)参照。

10) 1975年、人民文学出版社より刊行。同書には著者による前言も無ければ後記も掲載されておらず、目次も付されていない。第一章の前に「内容説明」があるのみである。奥付によれば、文字数34万、定価1.05元。発行部数は記されていない。B6版、全565頁。執筆、出版に到る過程については謙容(1984:pp.29-35)に詳しい。

11) 日本の資料で誕生日を記すのは辻田(1999:pp.593)のみ。

12) 《中国文学家辞典(現代第三分冊)》(pp.536)は“陈徳容”とするが誤り。“陈”と“謙”は同音。

13) 辻田(1999:pp.593)によれば、「本人の発音によりShèn Róngとすることもある」という。何火任(1987:pp.3)は“shèn”と注記している。

14) 《中国文学家辞典(現代第三分冊)》(pp.536)は1935年8月18日、湖北省武昌生まれとするが、謙容(1984:pp.22)に“公元1936年10月3日、我降生在多难的中国”とあり、“生在湖北汉口”とも記す。「1935年8月18日」は「民国25年陰曆8月18日」と明記すべきところを「1925年生まれ」では辻褄が合わないため、「35年」としたものと考えられる。謙容(1984:pp.22)に自身の母親の言葉を引用し“我这个女儿是民国25年阴历8月18日生的”とする。

間下放。その後、河南、安徽、四川などでも農村での生活を経験する。73年、北京で再び高校のロシア語教員となる。75年、長篇処女作『万年青』（農村を舞台に「包産到戸」の「修正主義妖風」とたたかう農民たちを描く路線闘争文学）を出版。78年、長篇第二作『光明与黑暗』（「農業学大寨」を宣揚したもの）の第一部を出版した。中共三中全会後、中篇小説『永遠是春天』（79年）で文壇における地歩を固め、『人到中年』（80年）で第一回全国優秀中篇小説賞一等賞を受賞し、一流作家の列に伍した。79年、中国作家協会に加入、専業作家となる。80年代にはこの他、深刻なテーマを風刺とユーモアで描いた『太子村的秘密』（82年）、『減去十歳』（86年）、『頼得離婚』（86年）などの作品を発表²¹⁾。90年代に入ると、長篇小説『人到老年』（90年）、『死河』（93年）を発表。

3. 「人到中年」について

中篇小説、全22章、約47,000字。諷刺“作者小传”によれば、1979年に『永遠是春天』²²⁾とともに執筆を終えており、文芸雑誌『收穫』1980年第1期に発表された作品である。表題となった“人到中年”は、“月過十五光明少”の後に続いて用いられ、“万事休”と続いて全体を構成する俗諺。すなわち、“月過十五光明少，人到中年万事休”²³⁾として人口に膾炙しており、この作品の表題はあたかも“万事休”を引き出す“歇後語”のような表現の効果をもたらす²⁴⁾。

「この作品を書くにあたっては、北京の有名な眼科病院に住み込み、つぶさに観察した」といわれる（福地1983pp.71）。

以下、先行研究の中から坂口（1995pp.160）、林芳

（1984pp.171-177）、高島（1985pp.152）等の記述にもとづき、作品の背景、プロット及び関連する事項をまとめることにする²⁵⁾。

『人到中年』が執筆されたのは79年である。76年10月の「四人組」逮捕によって終結した文革の後遺症からの脱却をはかる「四つの現代化」政策、「改革開放」路線が進行する中、政治的雰囲気は好転していたとはいえ、「四人組」とは関係の無い社会矛盾を作品の主題に据えることは憚られていた。“人到中年万事休”（人中年に到れば万事休す）という諺が示すように、この作品の意図は、これまで正面切って描かれることの無かった中年知識人の苦悩を現実の姿に即してリアルに描写し、医師としての職業的倫理観、（新中国社会主義）精神の気高さを中心に描き出すことにあったが²⁶⁾、文革後、急激に増大する知識人の過重な任務と役割、後回しにされ顧みられることのない不十分な待遇、経済的にも苦しい生活を訴えた面では、文革終結後当時の対知識人政策と大きな関わりを持っていたといえる。

1979年秋、医学院と関連のある名門総合病院に勤務する優秀な眼科医である陸文婷²⁷⁾は、同僚や患者からの信頼も厚かったが、冶金学研究所に勤務する研究者の夫と二人の子供を抱えながら、妻として母として生活と仕事に追われながら、その両立を果たそうとするものの、思い描く理想からはほど遠い現実にあるという自責の念に苦しめられている。難度の高い治療技術を持つ主人公が連日手術に追われ、ついに激務が原因となって過労のために倒れてしまう過程をつうじて、文革後の社会的機能を一手に担う中堅知識人、とりわけ大病院勤務の医師の職務と現実の生活環境によってもたらされる精神の葛藤を、ヒューマンな眼差しと、きめ細やかな筆致で綿密に書き上げており、中国社会の一側面を深く掘り下げて描き出すことで、中年知識人を中心とする広範な大衆からの共感と支持を得た。

陸文婷が心筋梗塞で生死をさまようラストシーン（第21章）では、同僚であり医学院では同期の医師姜亜芬が

21) 《新时期中篇小说名作丛书・谶容集》巻末の「諷刺中篇小説目錄索引」（pp.532）参照。これら以外に、『白雪』（『十月』1980年第2期）、『賛歌』（『收穫』1981年第1期）、『真真假假』（『收穫』1982年第1期）、『錯、錯、錯』（『收穫』1984年第2期）、『散淡的人』（『收穫』1985年第3期）、『楊月月与薩特之研究』（『人民文学』1984年第8期）、『走投無路』（『天津文学』1986年第1期）がある。

22) 『永遠是春天』は『收穫』誌1979年第3期に掲載。

23) 『故事俗信ことわざ大辞典』（尚学図書1982pp.752）に「月十五を過ぐれば光明なく，人中年に至れば万事休す」の項を掲げ、「月も十五夜を過ぎると次第に光が衰えるように，人間も中年になるともはや衰えて行くだけで手のほどこしやうがない」と説明するが、出典は記されていない。

24) 作品中では第九章に、劉学堯の発話として「（解放前の）旧社会には“人到中年万事休”という諺があった。当時の社会にあつては、我が民族は年齢を重ね老境に入る前に人生のピークを過ぎてしまい（“未老先衰”）、人は40歳になったばかりでもう人生は終わってしまい、これ以上何も成し遂げられないことを言い表している。（以下略）」として引用されている。

25) あらすじについては、辻田（1987pp.21）参照。

26) 林芳（1984pp.173）は「無視され忘れられていた中年の精神の美を見出し肯定し謳歌した点をより買いたい。実生活に鋭いメスを入れ、社会の矛盾を鮮やかに抉りだしてみせた腕の研ぎをより評価したい。」と述べる。

27) 作品では、中国南方の出身、42歳（1937年生まれ）。父親は出稼ぎに出たまま家にもどらず、母親が女手一つで育てあげ、1961年医学院卒業。すぐに眼科の勤務医として総合病院に着任という経歴に設定されている。

夫（同じ病院に勤務する医師）、娘とともに岳父が住むカナダに出発する場面を対照的に配置しているが、これは中国知識人の進むべき道に対する鋭い問いかけを行ったことになり、中国国内で大きな反響と議論を呼んだ²⁸⁾。批判が集中したのは姜巫芬夫妻のカナダ移住についてであるが、作者はその批判に答えるかのように、『她在国外』（『収獲』81年第6期）を書き、対知識人政策のまずさが頭脳の海外流出を招いているのは、まぎれもない事実であることを忌憚なく指摘している。一方日本では、知識女性の生き方という点で共感を呼び、訳書も数種類が出版されるほど話題となった。

1982年には、原作者自身の脚本による同名の映画が長春映画撮影所によって制作された²⁹⁾。

4. 日本語訳について

日本語訳は目下管見の及ぶ限り、1983年に発表された福地桂子訳をはじめとする四点を出版物として確認することが出来る。

- (1) 1983年、「人が中年になると」、福地桂子訳、日本民主主義文学会編『民主文学』第209号（通号259号）pp.10-70
- (2) 1984年、「人、中年に到るや」、林芳訳、中公文庫、pp.7-167
- (3) 1984年、『北京の女医——人、中年に到れば』、田村年記訳、第三文明社、pp.9-214
- (4) 1984年、『現代中国中編小説選——人、中年に到れば・航路標識のない河で』、柴田清伊知編訳、柴田清伊知自費出版、pp.1-108

(2)、(3)については大手出版社からの刊行であるため比較的入手しやすいが、(1)は文芸機関誌への掲載、(4)は地方における自費出版物³⁰⁾という理由から従来の翻訳リストには挙がって来ず、これまでその存在が広く知られることはなかったようである。

次に、四種類の翻訳について、第六章の中の一節について訳文を比較することで、それぞれの翻訳の特徴の一端を検討してみることにはしたい。

28) 『人到中年』に対する批判については田村（1985:pp.207-213）参照。

29) 榎本（1999:pp.1067）によれば、監督王啓民・孫羽、主演潘江。83年金鷄賞最優秀賞作品・最優秀主演女優賞、百花賞最優秀作品賞受賞。

30) 奥付によれば、訳者柴田清伊知氏は刊行当時茨城県日立市在住。

白内障の手術を受けに来た焦成思副大臣とその夫人に、趙天輝病院長が手術を担当する陸文婷医師を紹介する場面である。眼科医として18年の勤務実績があり、院長も推薦する陸医師に対して、夫人の秦波が党員でも主治医としての資格も有しない普通の医局員である陸医師に、夫の手術をまかせたくないと言って、趙院長に掛け合うやりとりが描かれている。

“赵院长，能不能请眼科孙主任亲自替老焦动这个手术？”

赵天辉摇摇头，笑了笑说：

“孙主任已经快七十了。他自己的眼睛也不行了。再说，他已经好几年没上手术台。他现在的任务是搞点学术研究，带好这一批中青年大夫，还有教学的任务。让他做手术，老实说，还不如让陆大夫做更有把握。”

“要不，请郭大夫做，行不行？”

（六:pp.24-25）

(1) 「趙院長，眼科部長の孫先生にじきじきに執刀していただけませんか？」

趙天輝は首を振り笑っていった。

「孫部長はもう七十近くです。彼自身の目がだめになっています。それに彼が手術をやらなくなってからもう何年にもなります。彼の今の任務は研究と若手医師の教育です。実際彼が手術するより、陸先生がやった方がよっぽど間違いありません。」

「それなら郭先生にお願いできませんか？」（福地pp.25-26）

(2) 「趙院長，やっぱり眼科の孫主任医師にお願いするわけには参りませんか？」

趙天輝は笑いながら首を振って、

「孫主任はもうすぐ古希を迎える方ですよ。最近では目も霞んで来ていますし、手術には何年も携わっておりませんので。現在は主に学術研究と中年、青年医師の指導にあたるほか、教壇に立ったりしております。手術となりますと、正直なところ陸先生の方が確かですが。」

「それじゃ、郭先生はだめですかしら」（林芳:pp.46）

(3) 「趙院長，この手術，孫主任にやっていただく訳には参りませんか？」

趙天輝は首を振りふり笑いながら、

「孫先生は七十歳です。ご本人の目さえもう駄目なんです。それにもう何年間も手術台に上がっていません。先生の現在の任務は学術研究をもって、中青年医師の指導教育を行うということです。手術というこ

とになれば、陸医師の方がずっといいように思います
が。」

「では、郭医師ではいかがですか？」(田村:pp.58)

(4)「趙院長、眼科の孫主任医師に御願ひして自ら主人の手術をして頂くわけにはいきませんか。」

趙天輝は首を振って笑いながら言った。

「孫主任はもうじき七十歳です。御自身の目も悪いのです。それに何年も手術をやっておりません。彼の今の仕事は学術の研究と、中年青年の医師団の指導及び教育です。実際、彼が手術するよりも陸先生がする方がずっと間違いありません。」

「それなら、郭先生にお願いできませんか」(柴田:pp.27)

“老焦”は夫の“焦副部长”を指し、“部长”は「大臣」の意。夫人の発話なので、文脈から(4)のみ「主人」と訳し、他は省略している。手術をする対象を示すのに“給”ではなく“替”を使っている点に注意。動詞の重ね型を連用する“摇摇头，笑了笑说”にも訳者それぞれの語感の違いが現れている。

夫を差し置いた高級幹部夫人の過干渉気味な口ぶり³¹⁾、名門大病院院長の実像を彷彿とさせるには口調をどう表現したらよいのか、実際に現地での体験を有する林芳³²⁾訳は、人物の形象を浮かび上がらせる表現力に富んでいる。

“再说，他已经好几年没上手术台。”を(3)は「それにも何年間も手術台に上がっていません。」と訳すが，“上手术台”は医者立場からすれば「手術台に向かう」であり、手術を受ける患者からは「手術台に上がる」の意であって、その関係性は“上课”あるいは“看病”などと異ならない。(1)(2)(4)のように「手術をする」、「手術に携わる」等の訳であれば問題ないと言えよう。

医学院と連携し医学生の実習を受け入れている総合病院であるが故の“还有教学的任务”を訳出しているのは(2)のみである。“还不如让陆大夫做更有把握”に見られる比較表現“还不如…更…”の屈折したニュアンスについても(2)の訳文が相応しい。

5. おわりに

ほぼ10年にわたる政治の支配と混乱(動乱)を終え

た後の10年に訪れた文芸界の新たな展開を「新时期文学」と称することは既に述べたが、それがどのような実態であるかについての理解は様ではない。宇野木(1995:pp.165)は「伤痕文学」³³⁾から「意識流文学」、「反思(反省・内省)文学」、「改革文学」への流れを「80年代文学思潮概念図」として示しつつも、「一説によると、80年代における文学思潮・文学流派なるものは、総計50種類にも及ぶとのことだ。各々の概念規定が曖昧であり、命名競争に近い様相も呈している。題材・手法といった次元の異なるものを同列に扱っているという問題も、気になるところだ。」と述べる。

吉田(1987:pp.4-7)はこの「新时期文学」の10年を「復権期——1977~1978」、「思想解放期——1979~1980」、「“自由化”引き締め期——1981以降」の3段階に分け、その特徴は「文学が〈政治〉の呪縛からひとまず解放されて、〈人間〉の問題を考え始めたことにある」とする。一般に「反思文学」の範囲に含まれる諷刺「人到中年」は、文革期の被害の告発のみにとどまった「伤痕文学」期を経た「思想解放期——1979~1980」の作品に位置付けられよう。同時期の作家には、王蒙・劉賓雁・白樺・高曉声・張賢亮など、かつて右派分子のレッテルを貼られた作家と、張潔・諶容・戴厚英といった文革後に登場してきた女性作家を挙げることが出来る。

諶容「人到中年」は、79年10月から11月まで開催された「中国文学芸術工作者第四回代表大会」³⁴⁾から、80年2月開催の中共十一期五中全会で鄧小平による「四つの基本原則」、すなわち「社会主義の道、プロレタリア独裁、党の指導、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の堅持」という思想的引き締め政策が打ち出されるまでの、わずか四か月足らずの間に生み出された「人間性」の問題を描いた作品であると言うことが出来るのである。

第3章では、陸文婷と夫である傅家杰の出会い、第20章には、病床での追憶の場面にハンガリーの詩人ペーフィ・シャーンドル(Petőfi,Sándor 1823-1849)³⁵⁾1847年の詩「我願意是急流」が引用されているが、修辭的效果を含め、この詩に関する考察は別の機会に行うことと

33) 上海復旦大学の学生盧新華の短篇『傷痕』(『文匯報』78年8月11日)が契機となって、一連の「傷痕」文学が書かれるに至った(吉田1987:pp.5)。

34) 「個々の作品を軽々しく政治問題に結びつける傾向、文学芸術の問題での批判を大衆的政治キャンペーンとして展開する傾向などが自己批判されたほか、50年代後半以降の文芸政策に一貫して極左思想の影響があったことが指摘され、建国後の文学芸術のありかた全体が再検討される気運に」あった(丸山・伊藤・新村:pp.38)。

31) 第19章で孫逸民眼科主任に「馬列主義老太太」と揶揄されている。

32) 林芳氏略歴については「訳者紹介」、並びに「訳者あとがき」を参照。

したい³⁶⁾。

6. 余論

“月過十五光明少，人到中年万事休”の出典は『喻世明言』卷三三：“恭人道：‘也是说一个六十来岁的。’大伯道：‘老也！月过十五光明少，人到中年万事休。’”とされる³⁷⁾。この俗諺は、元雜劇にしばしば用いられた“月过十五光明少，人过中年万事休”が元となっており、元曲からの用例は枚挙に暇無い³⁸⁾。

物事が頂点を極めた後は衰退に向かう道理を自覚するよう戒める諺に“月満則亏，水満則溢”³⁹⁾，“物極必反，盛極必衰”，また“物極則反，泰極則否”⁴⁰⁾がある。“人到中年”の如く，片言隻句をそれとなく遠回しに提示することで，ある（社会）現象の趨勢を比喩的に暗示する意図がこの作品に（も）込められているとの読み方が可能であるとしたら，それは読み手の想像を掻き立て，感覚を研ぎ澄ます仕掛け（装置）となって，社会（政治）に対する痛烈で鋭いアイロニー，風刺を表す寸鉄（人を刺す）の如く機能することになるであろう。

参考文献

谿 容1975《万年青》，人民文学出版社

——1984《并非有趣的自述》，《中国当代文学研究资料丛刊・谿容集》，贵州人民出版社，pp.20-39

——1986《新时期中篇小说名作丛书・谿容集》，海峡文艺出版社

《上海文艺报》社1981《1977—1980全国获奖中篇小说集(上)》，上海文艺报社

何火任1984a《中国当代文学研究资料丛书・谿容研究专集》，贵州人民出版社

——1984b《谿容小传》，《中国当代文学研究资料丛刊・谿容集》，贵州人民出版社，pp.3-9

——1984c《谿容著译系年(1975-1983)》，《中国当代文学研究

资料丛刊・谿容集》，贵州人民出版社，pp.455-461

何火任・王子红1984《谿容生平纪略》，《中国当代文学研究资料丛刊・谿容集》，贵州人民出版社，pp.10-19

《中国文学家辞典》编委会1985《中国文学家辞典(现代第三分册)》，四川文艺出版社

严家炎・陈美兰1986《现代小说》，《中国大百科全书・中国文学II》，中国大百科全书出版社，pp.1070-1077

於可训1998《中国当代文学概论》，武汉大学出版社

朱栋霖・朱晓进・龙泉明2007《中国现代文学史1917—2000(下)》，北京大学出版社

杨廷祥・袁长江・李静海・温小雁1989《古今俗语集成》第三卷，山西人民出版社

高增德・宋金龙・晋钟文1989《古今俗语集成》第四卷，山西人民出版社

翟建波2002《中国古代小说俗语大辞典》，汉语大辞典出版社

温端政2015《俗语大词典》，商务印书馆尚学图书馆1982《故事俗信ことわざ大辞典》，小学館

小田 実1983「『人到中年』・ひとつの「まえせつ」」，日本民主主義文学会編『民主文学』第209号（通号259号）pp.72-77

丸山 昇1983「『文革』後の中国文学——1976～1982——」，日本民主主義文学会編『民主文学』第209号（通号259号）pp.78-86

谿 容 1983「人が中年になると」（福地桂子訳），日本民主主義文学会編『民主文学』第209号（通号259号）pp.10-70

——1984a「人，中年に到るや」（林芳訳），中公文庫

——1984b「北京の女医——人，中年に到れば」（田村年記訳），第三文明社

——1984c「現代中国中編小説選——人，中年に到れば・航路標識のない河で」（柴田清伊知編訳），柴田清伊知自費出版

福地桂子1983「作者紹介」，日本民主主義文学会編『民主文学』第209号（通号259号）pp.71

林 芳1984「訳者あとがき」，『人，中年に到るや』，中公文庫，pp.171-177

田村年起1984「訳者あとがき」，『北京の女医——人，中年に到れば』，第三文明社，pp.205-218

丸山昇・伊藤虎丸・新村徹編1985『中国現代文学事典』，東京堂出版

高島俊男1985「谿容」，『中国現代文学事典』，丸山昇・伊藤虎丸・新村徹，東京堂出版，pp.152

現代中国文学研究会1986「決して面白くない自伝」，『80年代中国女流文学選(1)錯！錯！錯！』，NGS，pp.185-221

35) 魯迅著『野草』所収『希望』にベターフィのことは“绝望之为虚妄，正与希望相同”が引用されており，魯迅の思想にベターフィの影響の及んでいることが窺われる（丸尾常喜1997pp.128-132）。

36) ベターフィの中国語表記は“裴多菲”。“急流を”本文中では“激流”と表記する点が異なる。日本語は「われ急流なりせば」（今岡・徳永：pp.148）。

37) 温端政（2015pp.2139）参照。“中年”は「45歳」を指すという。『喻世明言』は『古今小説』とも称され，明末，馮夢龍撰。『警世通言』，『醒世恒言』と併せて『三言』と称される内の短篇小说集。

38) 高増徳他（1989pp.28-670）参照。

39) 翟建波（2002pp.1287）参照。

40) 温端政（2015pp.1800）参照。

- 竹内実・萩野脩二1987『中国文学最新事情』, サイマル出版会
- 吉田富夫1987「蘇生の光と影——新時期文学の10年」, 『中国年鑑1987年版』, 別冊『中国新時期文学の10年〔作家と作品〕』, 中国研究所編, 大修館書店, pp.4-7
- 辻田正雄1987「苦悩する知識人」, 『中国年鑑1987年版』, 別冊『中国新時期文学の10年〔作家と作品〕』, 中国研究所編, 大修館書店, pp.20-21
- 1999「謹容」, 『岩波現代中国事典』, 天児慧・石原享一・朱建榮・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎, 岩波書店, pp.593-594
- 中国文芸研究会1995『原典で読む図説中国20世紀文学——資料と解説』, 白帝社
- 坂口直樹1995「謹容」, 『原典で読む図説中国20世紀文学——資料と解説』, 白帝社, pp.160
- 宇野木洋1995「概説:80年代」, 『原典で読む図説中国20世紀文学——資料と解説』, 白帝社, pp.163-165
- 2003「コンパクト・中国二〇世紀文学史」, 『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』, 世界思想社, pp.3-31
- 丸尾常喜1997 東京大学東洋文化研究所研究報告『鲁迅「野草」の研究』, 東京大学東洋文化研究所
- 榎本泰子1999「人, 中年に到る」, 『岩波現代中国事典』, 天児慧・石原享一・朱建榮・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎, 岩波書店, pp.1067
- 鄭 万鵬2002『中国当代文学史——建国より20世紀末までの作家と作品・文学思潮を軸にして』(中山時子・伊藤敬一・藤井榮三郎・李玉敬訳), 白帝社
- 銭理群・呉曉東2003『新世紀中国文学——モダンからポストモダンへ』(趙京華・桑島由美子・葛谷登訳), 白帝社
- 萩野脩二2010『中国現代文学論考』, 関西大学出版部
- 樫尾季美2017「社会主義文学——新中国での建設と歩み」, 『中国文化事典』, 中国文化事典編集委員会, 丸善出版, pp.390-391
- 尾崎文昭2017「1980年以降の文学——規範からの離脱」, 『中国文化事典』, 中国文化事典編集委員会, 丸善出版, pp.392-393
- 今岡十一郎・徳永康元訳編1973『生誕150年記念ペーフィ詩集1823~1973』, 恒文社